

【編集後記】

本号では茅山および王屋山の現地調査報告を載せている。とくに王屋山について、山下論文は民間信仰との関わりに焦点をあてた論文となっているが、ほかは複数回の現地調査の報告であり、王屋山への現地調査の経緯がわかりにくい嫌いがある。後記のスペースを利用して、王屋山への現地調査の経緯およびそのときの感想を補記しておきたい。

私がはじめて王屋山に行ったのは2003年だったが、そのときは洞天調査の目的意識はそれほど強くはなかった。第一洞天ということで、同僚を誘って現状認識にでかけたわけである。それにつきあわせられた同僚のM氏は高所恐怖症で、天壇へのゴンドラでは意を決して乗車していた。そのとき天気は優れなかったが、M氏からすれば、足下がみえない分、気持ちはまだ楽だったという。そのM氏も、朽ちる寸前の紫微宮や本殿の跡地、そのまえに立つ司馬承禎を記念する石碑などをみて、この場所が歴史的に非常に重要であることに感慨深げであった。彼と私は、本殿跡地までトウモロコシをかき分けつつ近づいていき、そこに立つ石碑を観察したりした。このときの経験から、第一洞天たる王屋山の文物保護と研究が、重要でありながら遅れていることを悟ったのである。

それゆえ、そのあと2007年に鈴木健郎氏・森瑞枝氏と現地に行ったときは、洞天の調査研究を目的とした。前回の教訓として、現地は広い範囲に関連の遺跡が散在しており、観光化されている場所（陽台宮や天壇など）は独力で観察できるが、それ以外（清虚宮や玉真公主関連の場所）は位置すらなかなかわからない。位置がわかっても当局によって管理されている可能性が高い。そこで、事前に現地の文物管理所に問い合わせを試みたが応答はなかった。しかたなく、現地入りしてすぐに文物管理所にアポなしで直接問い合わせにいった。

濟源市文物管理所の方々は、当時の所長以下、突然の闖入者に対しても懇切に応接をしてくださった。私たちは疑問だった遺跡の位置を教わったばかりか、文物管理所で作成した資料まで入手することができた。さらに幸運なことは、道案内として若手の研究者である馮軍氏を紹介されたことだ。

彼の案内で、天壇に登った。その日も天気が優れず、景観はひらけなかった。しかし森氏のはるか彼方に洞窟らしきものが見えると指摘、馮軍氏の説明で、それが王母洞という洞窟であることを知った。地図に洞窟の印はたくさん出ているが、これこそ第一洞天の洞窟ではないかと心躍らせた。そこで無理を承知で、翌日に王母洞へ上がる案内を依頼した。馮軍氏は快諾、翌日、関連遺跡を見ながら王母洞への山道に入った。しかし、林道に入るとすぐに溪流を歩いて渡らなければならない、車ではそれ以上進めなかった。歩いて日帰りするには時間が不足していた。今回は断念するかという雰囲気になってきたとき、山上から木材運搬用らしきトラクターが降りてきたので、それを捕まえて交渉し、荷台に載せてもらって林道をあがった。こうして王母洞に接近し、洞内に立ち入

ったのが、私たちにとってはじめての洞天内部(?)への一歩だった。しかも付近には他にも靈山洞という洞窟があると知らされたが、当日は時間不足で調査できなかった。

ところで、あとから考えてみると、このとき私たちが文物管理所に問い合わせたのは、現地の文脈では絶妙なタイミングだったのである。現地では、王屋山の道教文化を発揚し、济源市の町おこしに利用しようとして、その一環として、文物管理所も道教遺跡の調査管理を進めていたらしい。そこへ外国人の研究者が洞天調査と称して突然やってきたわけだ。現地では、『济源古代文化研究』（政協济源市委員会編、中州古籍出版社、2006年12月）がすでに刊行され、『王屋山道学研究』（济源市王屋山道学文化研究会編、2008年8月創刊）という雑誌の刊行準備が進んでいたのである。そして道教文化に関する学術討論会も開催されるに至った。私たちが文物管理所を訪れた翌年、2008年4月に「第一洞天」王屋山道学文化研究会、その後も2011年7月に「第二回王屋山道学文化研究会」などを開催している。残念ながら私たちは参加していないが、第二回研究会には本研究の研究協力者である王宗昱氏が参加している。

さて、第一洞天の研究では、魏華存との関係が問題となるが、上のような現地調査のプロセスにおける馮軍氏との討論を通して、济源市一帯に現在でも魏華存信仰が続いていることを知った。じつは、当地の魏夫人信仰の歴史については、愛宕元氏が「南嶽魏夫人信仰の変遷」（吉川忠夫編『六朝道教の研究』春秋社1998年）で周到な論述をしている。しかし、清朝以降のそれについて述べる紙幅を残していなかったようである。愛宕氏が現地調査をされたのか寡聞にして承知していないが、この論文の執筆は現地調査をふまえていないようである。にもかかわらず、愛宕氏は現在の魏夫人信仰の存在についても論文中で予想しており、魏夫人を祀った静応廟や洞窟の存在を載せる『中国文物地図集』を観察して、「木潤が現在では仙神河と呼ばれていることは、この地での魏夫人信仰の根強さをうかがわしむるものとしてはなほだ興味深い」と述べている。しかし、私たちは正直なところ、現在においても魏夫人信仰が続いているとは、それほど予想していなかったのである。

そんなわけで、2011年夏の現地調査では、天壇と王母洞だけでなく、魏夫人を祀った「二仙廟」の調査を計画した。馮軍氏は私たちの希望に応じて、济源市に所在する二仙廟だけでなく、東隣の沁陽市の二仙廟である静応廟まで案内してくれた。静応廟に勤める女性信者（道士の服装だった）にインタビューしたところ、魏華存が修道したという洞窟の存在を教えられた。非常に驚くとともに、現地に行ってみたいという気持ちになった。しかし、このときの調査日程では登山は無理で、月日をあらためて再びアプローチすることになった。

あらためて济源に向かったのは、2ヶ月後の2011年秋だった。詳しくは本誌に載せる鈴木報告に譲るが、まず王母洞と靈山洞を調査した。靈山洞は東向

きに4門の入口があり、内部ではそれがつながって、西向きの門に出る。概念的には5つの門があることになり、これは茅山句曲に5つの門があるとされているのに似ている。また、東側の門からは天壇山はみえず、洞窟の中を通過して西門に出ると視界がひらけて、彼方に天壇が眺望できる。天壇までは広い空間がからっぽにひらけており、まさに暗い洞窟を抜けると向こう側が仙界であるかのように感じられる効果がある。西向きの門を出ると、足下は橋のようにわずかなスペースしかなく、その下は、30メートルはあろうかという断崖絶壁である。目の前にひらける仙界の眺めに、空を飛べると錯覚した人が何人もここから墜落したのではないか、と思われて、足が震えた。本誌の山下論文で引用される清・乾隆26年の『済源県志』巻二の一文「王屋漢洞と王屋唐洞は、いにしへの棲真の所である。洞の後ろに石の梁があり、ここから八仙嶺に通じている」とある石梁とは、靈山洞の西門のことであろう。

その晩は、済源市文物管理所の高明所長による歓迎の宴となり、第一洞天を認識した喜びで乾杯を受け続け、日本側は全員、正体不明に陥った。普段はあまり飲まない高明所長も、歓迎の意を表して相当に飲んだようだった。

翌日、懸案だった修仙洞の現地調査に赴いた。その際に紹介されたのが、沁陽市仙神谷風景区二仙廟管理处の任和平氏である。任氏は自身の足で静応廟周辺の山岳地の景観地図を作成していた。これは、現地の研究者でなければ作れないものである。私たちはこの地図をみて感嘆の声をあげた。このような資料は現地調査でなければ入手できない。またこのような人物と知り合って同行できたのも、現地調査の醍醐味だろう。任氏に案内されて、魏華存の修仙洞に登ったが、ここは道案内人がいなければ、まずみいだせないと思われた。

修仙洞が魏華存と関わるかどうかは、文字資料が存在しないため不明とせざるをえない。しかし、この洞窟のふもとに唐代の魏夫人祠があったのであり、両者はなんらかの関係があったのかもしれない。

また、愛宕氏の論文のときにはまだ発見されていなかったが、「劉媚子墓誌」の発見（周治「南岳夫人魏華存新考」『世界宗教研究』2006年第2期、65～70頁）は、魏華存の存在をほのめかしているように思われる。この墓誌によると、劉媚子は晋の振威將軍で鄱陽太守・都亭侯だった琅耶臨沂郡都郷南仁里の王建之の妻であり、魏華存の係累の可能性が高い。つまり、劉又（修武令、魏華存の夫）—劉璞—劉媚子（泰和六年＝371年に死去）となる。

以上、調査における現地の協力と新しい認識を紹介した。今後は、こうした新しい認識に文献からも検討を加えることによって、王屋山第一洞天と魏華存の道教について、より一層の理解を進めていきたいと考えている。

本誌制作には小谷竜一氏（株）R.E.N.の協力を得た。記して謝意を表したい。（土屋昌明）